

会陰・陰囊部類表皮嚢胞の1例

兵庫医科大学泌尿器科教室 (主任: 島 博基教授)

丸山 琢雄, 上田 康生, 鈴木 透, 前田 信之
善本 哲郎, 近藤 宣幸, 野島 道生, 瀧内 秀和
森 義則, 島 博基

兵庫医科大学病院病理部 (主任: 窪田 彬教授)

窪 田 彬

EPIDERMOID CYST OF PERINEO-SCROTAL REGION: REPORT OF A CASE

Takuo MARUYAMA, Yasuo UEDA, Touru SUZUKI, Nobuyuki MAEDA,
Tetsurou YOSHIMOTO, Nobuyuki KONDOH, Michio NOJIMA, Hidekazu TAKIUCHI,
Yoshinori MORI and Hiroki SHIMA

From the Department of Urology, Hyogo College of Medicine

Akira KUBOTA

From the Department of Clinical Pathology, Hyogo College of Medicine

The patient was a 36-year-old male with a chief complaint of painless mass in the perineum. An elastic and immobile mass with the tip of thumb finger size was palpable in the left perineum and magnetic resonance imaging (MRI) showed the tumor with high intensity on T2 weighted image from perineum through left scrotum. The tumor was surgically removed and a histopathological study revealed epidermoid cyst.

(Acta Urol. Jpn. 50 : 885-887, 2004)

Key words: Epidermoid cyst, Perineum, Scrotum

緒 言

類表皮嚢胞 epidermoid cyst は, 全身のいたるところに発生する腫瘍であるが, 泌尿器科領域では主として精巣にて発生する比較的稀な腫瘍で, 精巣腫瘍の約1%を占める¹⁾. これに対して陰囊から会陰部皮下に発生する epidermoid cyst は非常に少ない²⁾. 今回われわれは36歳男性に発生した会陰・陰囊部類表皮嚢胞の1例を経験したので若干の文献的考察を加えて報告する.

症 例

患者: 35歳, 男性

主訴: 会陰部腫瘍

既往歴・家族歴: 特に異常なし

現病歴: 2000年4月頃, 会陰部に母指頭大の無痛性腫瘍を自覚していたが放置. 2001年3月頃から腫瘍が増大してきたために近医を受診し, 同年4月27日に精査加療の目的で当院へ紹介受診となった.

現症: 身長 169 cm, 体重 61 kg, 血圧 130/72 mmHg, 脈拍 66/min, 整. 会陰部の正中よりやや左側に母指頭大の腫瘍を触知した. 腫瘍は表面平滑で,

弾性硬, 可動性なく, 圧痛を認めず. 同部位の皮膚には視診上異常認めず. DRE を含めた触診では尿道, 肛門とは離れていた. 腫瘍は, 会陰部から陰囊底部に向かっていたが, 陰囊との連続性は不明であった.

その他理学的異常所見なし.

血液検査所見: 末梢血では特に異常認めず. 生化学検査では尿酸値 8.4 mg/dl の上昇を認めた以外は異常なし. CRP, 赤沈, 検尿, 尿沈渣に異常なし. MRI: 腫瘍は会陰より陰囊内に連続しており, 腫瘍壁は正常で周囲との境界は明瞭, 中央部にくびれを認めた. 病変部はガドリニウム造影 T1 強調画像にて iso intensity を示し, T2 強調画像では, high intensity を示した (Fig. 1).

以上より嚢胞状病変を考え2001年7月2日全身麻酔下に高位碎石位をとり腫瘍摘出術を施行した.

手術所見: 会陰部の腫瘍直上に皮膚切開をおき, 周囲を剝離すると腫瘍と皮膚とは癒着していたが, 周囲組織との癒着を認めなかった. 腫瘍は外観黒褐色で cystic であった. 術前の MRI の所見に示唆されたように中央部はくびれており, 頭側へ剝離をすすめていくと腫瘍は陰囊内に連続していたが, 精巣鞘膜とは連続していなかった (Fig. 2).

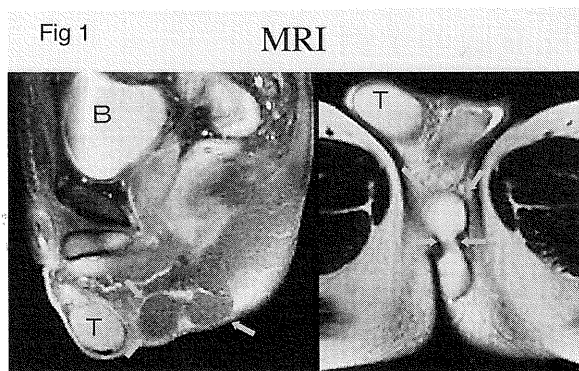


Fig. 1. (A) Sagittal T1-weighted MRI. MRI showed iso signal intensity. B: bladder, T: testis. (B) Transverse T2-weighted MRI. MRI showed high signal intensity.

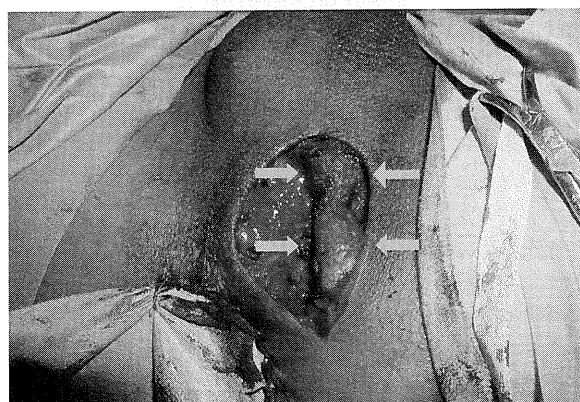


Fig. 2. Operative finding. Arrow shows the tumor.

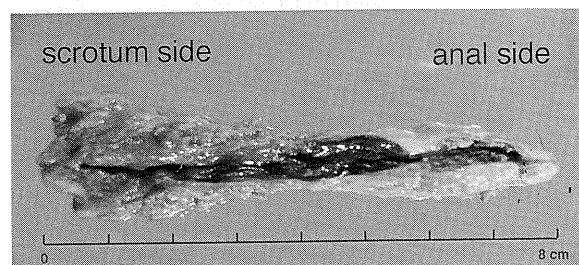


Fig. 3. Extirpated specimen. The well-circumscribed tumor was $8.3 \times 2.5 \times 1.0$ cm in size, and weighted 12 g. The tumor contained mud-like gray material.

摘出した腫瘍は大きさ $8.3 \times 2.5 \times 1.0$ cm, 重量 12 g で表面は比較的平滑, 薄い被膜を有し内容物は灰白色泥状物質であった (Fig. 3). 内容物の細胞診は Papanicolaou class I であった.

組織学的所見: 嚢胞壁は非薄化した重層扁平上皮からなり, 中に角化物を認めたが脂腺や毛髪などの皮膚付属器はなく, 類表皮嚢胞と診断された (Fig. 4).

現在術後2年8カ月経過し, 外来にて経過観察中であるが, 明らかな再発・転移は認めていない.

考 察

泌尿器科領域に見られる epidermoid cyst は比較的

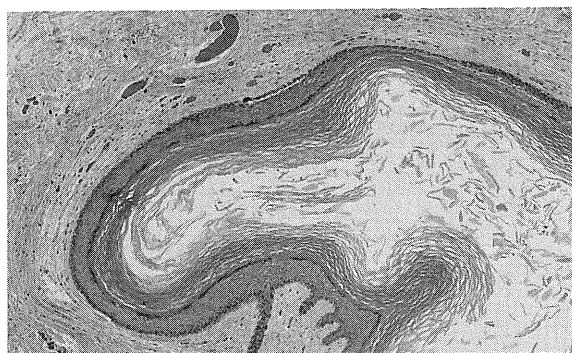


Fig. 4. Microscopic finding of the tumor (H-E stained $\times 40$). The wall of the cyst consisted of stratified squamous epithelium and keratinous material inside without skin adnexae like a hair and sebaceous gland.

稀であり, 主に精巣で発生し150例余りが報告されている³⁾.

これに対して陰嚢皮下に発生する epidermoid cyst は非常に少ない. Epidermoid cyst は, 以前粉瘤⁴⁾, 表皮嚢腫, 外毛根鞘性嚢腫, 脂腺嚢腫と同義語として用いられた時期があった. このため訳語が混乱し, 泌尿器科・口腔外科・脳神経外科領域において epidermoid cyst は表皮嚢腫 (epidermal cyst) と病理学的に同一の病変と報告されていた. 現在では epidermoid cyst は表皮嚢腫と異なり類表皮嚢胞と病理学的に分類されている. Pinkus ら⁵⁾は, 皮膚の表皮以外の組織や皮膚以外の組織, またその他の多くの上皮組織などが扁平上皮化生することにより発生したと考えられる嚢腫は, 本来の皮膚表皮より発生したと考えられる epidermal cyst と区別し epidermoid cyst と呼ぶことが望ましいと述べている. しかし会陰部, 陰嚢内における epidermal cyst は, 病理学的に epidermoid cyst との鑑別が困難であり同義に報告されてきたため文献集計上は, 佐藤ら²⁾の集計のように同一として報告されている.

このような背景から今回われわれは, 坂元⁶⁾・玉田⁷⁾・根笹⁸⁾らの報告を基に陰嚢皮下に発生する epidermoid cyst について集計を行ったところ, 自験例を含めるとわが国での2001年までの28年間の報告は合計35例であった^{2,6-13)}. 年齢は3~87歳までみられ平均46.6歳, 年齢別に見ると10歳以下に3例見られたほか, 41~60歳に19例と全体の約半数を認めた. 部位別では右15例, 左13例, 正中7例, 腫瘍重量は平均429.3 g (最小4.7 g, 最大1,900 g) であった. 治療内容は, 全例に腫瘍摘出術が施行されていた. なお, この集計では記述した理由により epidermal cyst と報告されているものも含まれている.

Epidermoid cyst の発生原因については, 1: 陰嚢縫線の癒合不全による先天性埋没, 2: teratoma の亜

型, 3: 外傷による発生, 4: eccrine 汗腺の閉塞あるいは破壊, 5: 先天性表皮の迷入などの説^{14,15)}が考えられているが, 真の発生原因は現時点では明らかではない。しかし多くの症例で外傷との相関が明らかでなく, また腫瘤内容は, 角化物が主で毛嚢, 汗腺などの皮膚付属器は認められないことより 2, 3 は懷疑的であるとされている。このため 1 の陰嚢縫線の癒合不全による先天性埋没を支持する意見が強く^{16,17)}, わが国の報告例においても, 10歳以下の 3 症例のうち 2 例は正中に発生しており, この説を裏づけるものであると思われる。

超音波断層法による診断では, 類表皮嚢胞は精巣と同一輝度を示すが, やや hypoechoic で内部エコー均一な腫瘤としてとらえられることが多いため充実性腫瘤か嚢腫かの診断するのは難しいとされている¹⁸⁾。本症例では腫瘤が会陰部にあったために MRI を優先させたために超音波断層検査は施行していない。事実, 近年類表皮嚢胞の診断には MRI が有効であるとの報告がある。MRI 上嚢胞は, T1 強調画像で iso intensity, T2 強調画像で high intensity を呈し, 精巣との鑑別が困難であるが, 造影剤により enhance されないのが類表皮嚢胞の特徴であるとされている¹⁸⁾。自験例も MRI 上嚢胞と診断され, 本症の診断に MRI は非常に有効であると思われた。Epidermoid cyst の根治的治療としては, 一般的に嚢胞壁を残さず核出する手術が行われており, 術後再発の報告は現在のところない。Epidermoid cyst は, 一般に良性とされており悪性化することはきわめて稀である。しかしごく稀に悪性化の報告¹⁹⁾があるため術前 MRI により嚢胞と周囲組織との関係を正確に把握し, 手術時には嚢胞を確実に一塊として摘出する必要がある。また感染を伴った epidermoid cyst については, ドレナージのみでよいとする意見もあるが, 組織学的な確認の必要性と再発予防の点から感染を伴った epidermoid cyst についても腫瘍を摘出すべきであると考えらる。

結 語

36歳, 男性の会陰・陰嚢部類表皮嚢胞の 1 例を経験した。類表皮嚢胞の画像診断には MRI が非常に有用であり, 手術では嚢胞壁を含めて一塊として摘出することが重要であることを述べた。

本論文の要旨は第176回日本泌尿器科学会関西地方会にて発表した。

文 献

- 1) Shah KH, Maxted C and Chun B: Epidermoid cysts of the testis: a report of three cases and an

analysis of 141 cases from the world literature. *Cancer* **47**: 577-582, 1981

- 2) 佐藤英一, 岡 聖次, 世古宗仁, ほか: 会陰部類表皮嚢胞の 1 例. *西日泌尿* **60**: 42-44, 1998
- 3) 山本圭介, 高田 剛, 桃原実大, ほか: 超音波にて術前診断が困難であった精巣類表皮嚢胞の 1 例. *泌尿紀要* **49**: 213-215, 2003
- 4) 斉藤 脩, 鈴木不二彦, Nasemann TH, ほか: 皮膚付属器に関連する嚢胞. 臨床医と病理医のための皮膚病学: pp 262-268, シュプリンガー・フェアラーク東京株式会社, 東京, 1988
- 5) Mehregan AH: Cysts related to the adenexa. In: *Pinkus Guide to Dermatohistopathology*. Edited by Kircher JL. 6th ed, pp 595-606, Prentice-Hall International Inc, Detroit, Michigan, 1995
- 6) 坂元 武, 東 治人, 岩本勇作, ほか: 陰嚢内類表皮嚢胞の 1 例. *泌尿紀要* **44**: 683-685, 1998
- 7) 玉田 聡, 和田誠司, 岸本武利, ほか: 陰嚢内に発生した Epidermoid cyst の 2 例. *泌尿紀要* **45**: 285-288, 1999
- 8) 根笹信一, 江原英俊, 出口 隆: 細菌感染を合併し自壊した陰嚢内類表皮嚢胞の 1 例. *泌尿紀要* **47**: 441-443, 2001
- 9) 原田昌幸, 日村 勲, 徳田直子, ほか: 陰嚢内類表皮嚢胞の 1 例. *泌尿器外科* **7**: 967-970, 1994
- 10) Musa FM, Inui M, Kuwata Y, et al.: Epidermoid cyst of the scrotum: a report of two cases. *西日泌尿* **57**: 1050-1053, 1995
- 11) Kawai N, Sakagami H, Awata S, et al.: Epidermoid cyst of the scrotum: a case report. *泌尿紀要* **42**: 609-611, 1996
- 12) 吉永英俊, 高木紀人, 平田祐司, ほか: 陰茎・陰嚢縫線上に発生した類表皮嚢胞の検討. *西日泌尿* **60**: 11-13, 1998
- 13) 竹垣嘉訓, 坂本 亘, 田代孝一郎, ほか: 陰嚢内類表皮嚢胞の 1 例. *日小児泌会誌* **8**: 68, 1999
- 14) 樋口 潔, 河辺洋爾: 外陰部懸垂性巨大表皮嚢腫 (Epidermoidzyste) の 1 例. *秋田医師会誌* **14**: 39-41, 1962
- 15) 鈴木 正, 池田重雄: 表皮嚢腫. *皮膚診療* **5**: 909-912, 1983
- 16) Sadler BT, Greenfield SP, Wan Julian, et al.: Intrascrotal epidermoid cyst with extension into the pelvis. *J Urol* **153**: 1265-1266, 1995
- 17) Picanco-Neto JM, Lipay Marco AS, D'Avila Cleversson LR, et al.: Intrascrotal epidermoid cyst with extension to rectum wall: a case report. *J Pediatr Surg* **32**: 766-767, 1997
- 18) Koenigsberg AR, Kelsey D and Friedman AC: Case report: ultrasound and MRI findings in a scrotal epidermoid cyst. *Clin Radiol* **50**: 576-578, 1995
- 19) Miller JM: Squamous cell carcinoma arising in an epidermal cyst. *Arch Dermatol* **117**: 683, 1981

(Received on April 20, 2004)
(Accepted on July 17, 2004)